

林 紓 を 罵 る 快 楽 (2)

樽 本 照 雄

補 足

前出の林紓「論古文之不宜廢」について補足をする。松村茂樹氏より、掲載紙『民国日報』に「文選」欄とあるから再録したのではないかとご教示いただいた。資料類には何の説明もなかった。それで私は、「文選」という表記を頭から無視してしまっただけらしい。確かに、その可能性が高いように思う。前述したように林紓とオーストラリアの『民国日報』とが直接には結びつかない。再録であれば、この疑問も氷解する。ならば、初出は、どこなのか。まだ、探し当てることができない。

もうひとつつけ加える。この『民国日報』についてだ。

『中国近代報刊名録』には、オーストラリア発行のものしか掲載されていない。中国人民大学と上海図書館が部分的に所蔵していると説明もしている。私が入手した複写は、該記事の部分だけだ。たぶん上海図書館所蔵のものだろう。

あとから、当時発行されていた同名の新聞がほかにもあることに気づいた。ひとつは、1916年1月22日、上海で創刊された国民党の機関紙だ*15。あるいは、漢口で1913年に創刊されたものもあるらしい*16。

ところが、上海図書館所蔵新聞目録には、あるはずのオーストラリア『民国日報』が収録されていない。なぜだか私は知らない。所蔵されているのは、前述1916年創刊の『民国日報』だ。ほかにも同名の新聞はあるにしても、時間的に合致するのは、これだけだ。今のところ、書くことができるのは以上である。

『民国日報』がオーストラリアの漢字新聞かどうかは、疑問符をつけてひとまずおいておく。

林紓の該文が、各種資料に収録されていないことは何を意味するのか。一般には

目にすることができない文章だということだろうか。胡適以外に引用する人がいないこともそれを裏付けているようにも見える。ただし、簡単に見ることができない文章であろうとも、白話運動を激しく攻撃する内容であれば、反撃の標的となるだろう。しかし、そうではなかった。うち捨てられた。林紵の文章など検討に値しない、と判断されたのではないかと私は思ったりもする。批判された人物の新聞掲載文だから研究者の関心を引かなかったものか。たとえば、最近出版された方漢奇、史媛媛主編『中国新聞事業図史』（福州・福建人民出版社2006.1）でも「論古文之不^{ママ}当廢」と題名を誤ったままだ。ただし、上海『民国日報』と書いている（129頁）。楊聯芬を除いては、調査に力が入っていない。

雑誌『新青年』を取り巻く状況をもう一度ながめてみよう。

旧文人たちからの反応がまったくない。空中で拳をふりあげているだけで、怒りの持っていきようがなく寂寞にとらわれていた（鄭振鐸のことば）。そこに胡適からの通信文が舞い込む。林紵が古文を擁護しているらしい。銭玄同、劉半農らは、これを見逃しはしなかった。

今まで像を結ばなかった敵の姿が、林紵という具体的な名前で焦点があってくる。その主張が控えめであろうと、全文を読むことができなくとも問題ではない。自分たちに賛成しない意見を出す人間は、即敵対者である。待ちにまった敵の出現なのだ。

彼らは、敵を林紵に見定めて攻撃するにあたり、ひとつの工夫をせざるをえなかった。林紵の文章を読むことができないから、それに反論を書くという形を取ることができない。しかも、胡適の報告によると、反論するにも値しない文章だという。そうであれば、古文を擁護する偽論文を創作すればよい。それへ反論するのである。古文擁護も攻撃と見なす、攻撃を受けたからやむを得ず反撃する、という巧妙な仕掛けでもある。まさに、人の意表をつく方法だということができよう。

4 林紵批判のはじまり 捏造論文による挑発

今から思えば、胡適がニューヨークから投函した通信文が、かすかな予兆だった。林紵の名前が胡適によって公表された約10ヵ月後のことである。『新青年』に王敬軒の手紙が掲載された。これには劉半農の回答がついて1組なのである。本格的な林紵批判が開始された。

鄭振鐸の概説

五四時期の文学状況についての概観は、鄭振鐸が前出『中国新文学大系』第2集文学論争集に掲載した「導論」を元資料として記述されることが多い。

鄭振鐸（1898-1958）は、1917年、北京の鐵路管理学校に入学した。1919年、瞿秋白らと五四新文化運動を宣伝し社会改造を主張する『新社会』などを発刊する。また、彼は1921年に發起人のひとりとして文学研究会を設立し、商務印書館編訳所に入った*17。彼は、十分に文学革命派の一員なのだ。

その鄭振鐸が、大系のなかの「文学論争集」を編集し概説を書いている。彼が論争の状況を身近に見聞していることは間違いない。しかし、考えてみれば異様である。なにが異様かといえば、論争を見ていたとはいえ一方の側に立つ人物が約20年前を回想して記述しているのだ。勝者の記録にほかならない。公平で客観的な論述を期待するのはむづかしいだろう。そう考えるのが普通だ。鄭振鐸の文章は、一方に偏向しているという前提で読まなければならない。

王敬軒登場までのいきさつを、鄭振鐸が述べるこの「導論」にしたがってあらためて紹介しておきたい。彼の文章を慎重に読めば、事実が浮き出てくるはずだ。状況の把握には役立つと考える。しかも、勝者の記述にはどこかほころびが生じているのを見つける可能性もあろう。

陳独秀の主宰する『青年雑誌』が『新青年』に改題され、胡適「改良文学芻議」^{ママ}（2頁。鄭振鐸が誤記している。正しくは「文学改良芻議」）、陳独秀「文学革命論」をへて胡適「建設的文学革命論」が発表されることを各論の内容をまじえて紹介する。この部分で鄭が幻の林紘論文に言及しないのは、理由がある。若者の前に立ちほだかるのは、強い敵対者でなければならない。気弱な林紘は、彼にはまったく必要がないのだ。意図的に省略したとわかる。

当時の言論界において、文学革命派に対する反応がどのようなものであったか。どのように鄭振鐸が書き込んでいるだろうか。私はそこに興味を感じる。

彼ら（注：陳独秀、胡適ら）が初期の2、3年間に文学革命の問題を討論していた時、賛同者たちはもとより日一日と増加をしていたが、それに反対する人も少なくはなかった。ただし、みな有力であったわけではない。当時、付和雷同する人々が『新青年』に少なからぬ文章を発表したが、往々にして凡庸な折衷論に走るものだった。4頁

はかばかしい反応が生じなかった、つまり文学革命論が最初から大方の支持を得たわけではないことが述べられている。鄭振鐸の説明を見ると、反対論がほとんど発生しなかったし、支持もない、無視に近いものであったことがよくわかる。それが現実だった。

言論界は無反応であった、というのは、魯迅が書いた文章で有名かもしれない。当時、魯迅は、北京政府の教育部に勤めていた。その彼が「狂人日記」を『新青年』に発表するきっかけになったのが古い友人錢玄同の勧めだった。以下は、魯迅のあの有名な「自序」から。

彼ら（注：金心異。錢玄同のこと）はそのころ『新青年』雑誌を出していたが、しかし、賛成してくれる人もいなければ、反対する人もまだいないかのようだった。彼らはたぶん寂寞を感じていたのだろう、と私は思った。^{*18}

ここで重要なのは、最初は反対者がいなかったという事なのだ。魯迅から見ても、反応のない状況だった。林紓の姿などどこをさがしてもありはしない。だからこそ、後に錢玄同は王敬軒名の捏造論文を発表しなければならなかった。それをバネにして勢いがついたところで、文学革命派の支援者が登場する。月刊誌『新潮』だ。1919年、北京大学の学生傅斯年、羅家倫などが白話の雑誌を創刊し『新青年』に相呼応した。援軍のひとり羅家倫が『新潮』に発表した興味深い、「とても」と修飾語をつけてもいい彼の論文については、あとで詳述する。

さて、鄭振鐸の文章にもどる。

「文学革命」という大旗が立てられたのは、旧文人たちの意表を完全に果たした〔出於旧文人們的意料之外〕できごとだった。彼らははじめは相手にせず無視し、ついで輕蔑しともに論じることを潔しとせず、ついには憤怒し呪詛せずにはすまなかった。5頁

旧文人たちの反応の変化を概括する。徐々に変化していったかのように書いてある。だが、事實は、突然に憤怒したのだ。この劇的变化がおこったのには、ある人為的な操作が必要だった。いうまでもなく、例の捏造論文による挑発である。

『新青年』第4巻第3号に王敬軒の『新青年』編集者あての手紙と劉復（注：半農）の王敬軒への返書が同時に掲載された。王敬軒は、もともと名なしの権兵衛[亡是公、烏有先生]である。王敬軒が書いた手紙ということにしていたが、ほかならぬ新青年社の同人銭玄同の手になるものだった。／彼らはなぜそのような「苦肉の策」を演出する必要があったのか。／彼らが「文学革命」の大旗を立ててからというもの、はじめから終わりまで有力な敵たちに出会うことはなかった。彼らは「桐城派はろくでなし、文選学は魔物だと見なしていた」。しかし、いわゆる「桐城派、文選学」の者たちは、はじめから終わりまで全然とりあおうとはしなかった。ゆえに、多くの考えがあったが彼らはまったく表現しつくすことができなかった。旧文人たちの反抗言論がひっそりとして聞こえてこないものだから、彼らは空中に拳をふりあげるだけで、寂寞の感を抱かざるをえなかったのだ。／いわゆる王敬軒のその手紙は、旧文人の多くの見解をひとつにまとめたもので、それに痛快な致命的一撃をくわえたのだった。／しかし、しばらくして、真に有力な反抗運動がやってきた。5-6頁

王敬軒という偽名を使った捏造の手紙である、と鄭振鐸は書いているのかわらない。旧文人が憤怒するようにし向けた「苦肉の策」であった。その表現を見れば、あたかも文学革命派が追いつめられたように書いてある。だが事実は、反応がないから手の打ちようがない、だから追いつめられた、と彼らが勝手に感じただけだ。究極の打開策が、策略であった。それをあっさり認めている。驚くべき天真爛漫さである。その行為について、やましさを恥ずかしさをみじんも感じていないからこそ書くことができたというべきだ。なすべき事をやったという態度だし、正統性を疑うということもない。文学革命のために文書を捏造してどこが悪い。鄭は、居直ったということができる。自分は勝者だという認識から生じた傲慢な記述だと私には思える。

王敬軒をめぐる不可解なこと、ひとつの謎

王敬軒の偽手紙がどのようなものであったかを検討する前に、不可解なことについて述べたい。

王敬軒が銭玄同だということは、周知の事実である。辞典、筆名録などでは、王

敬軒を錢の筆名だと記述するものがほとんどだ。はっきりいって、これには、私は違和感をおぼえる。自分の考えを筆名で発表することにはある。なんらかの事情で本名を使うことができないばあいもあるだろう。だが、自分では信じてもない反対主旨の文章を公表するときに使用したのも、筆名であろうか。大いにおかしい。こういう時は、筆名ではなく、偽名というべきだ。私は、そう考えて本稿では、偽名と称する。

もうひとつ不明なことがある。

今でこそ有名な捏造書簡である。研究者のだけれどもが、当たり前的事实として紹介する。王敬軒は錢玄同である、と書く。だが、当然のことながら『新青年』誌上に掲載された時、偽名だと書いてあるはずがない。捏造であることは隠されたし、本当のことが明かされるのはずっと後になってからだ。

それを最初に書いたのは、誰か。これが、はっきりしない。

鄭振鐸は当時の状況をよく知っていた。だから、「中国新文学大系」の「導論」（1935）において捏造であったと述べている。だが、これが文献にあらわれる最初かと言えば、あやしくなってくる。

1918年に王敬軒が登場してのち、鄭振鐸の指摘が公表されるのは1935年だ。単純に引き算をして17年の時間が経過している。その間、捏造された手紙であるとはわからなかったものか。

錢玄同自身が、どこかに書いていないか。一応は探した。だが私の力が不足しているらしくみつからない。

たとえば、1919年2月14日付だという周作人にあてた錢の手紙がある。

その内容はみつつの質問だ。そのひとつが林紓の翻訳についてのもの。

また、「詩人解頤語」というのは、大文豪があれ（割注：チェンバース書店の短篇物語）を訳した書名ではありませんか。*19

錢玄同が質問をしたのは、周作人の論文「論黒幕」のなかで述べたことに関係している。周は、次のように書く。

チェンバース書店が子供の作文練習用のために編集した短篇物語を詩人解頤語と訳して西洋の聊齋志異と見なした。このような状況は笑止だとはいえ、彼

の度量の大きさを称賛すべきだ。なぜならば全身が經典賢伝まみれの人が、意外にも外国のものをもってきてこじつけるのは、中国ではやはり珍しいといわねばならない。^{*20}

署名は仲密、該文は「文藝時評」欄に掲載されている。周作人が示し、錢玄同が質問した『詩人解頤語』とは、ほかならぬ林紘の翻訳であった。

(英) 倩伯司戲輯 林紘、陳家麟訳『詩人解頤語』(上海商務印書館1916.12/1918.6再版 説部叢書3=17) 馬泰来は W.& R.CHAMBERS,LTD. 発行の CHAMBERS'S COMPLETE TALES FOR INFANTS か、という。

周作人は、該論において林紘の名前をあえて出していない。錢玄同は、手紙でそれを確認したばかりか、林紘を指して「大文豪」だという。明らかに皮肉である。名前をよほど書きたくなかったらしい。それほどまでに嫌っていた。

私がこの私信に注目するのは、署名が「王敬軒 / 黄介石同啓」だからだ。林紘を話題にしているからこそわざわざ王敬軒の名前を使用したとわかる。錢玄同が王敬軒の偽名で林紘を攻撃したことを踏まえているのは説明するまでもない。仲間内では、当然ながら周知の事だったからだと理解する。黄介石は、「皇該死」ではないかという指摘がある^{*21}。「活該」と「該死」だと考えればクタバレの二乗になる。錢はふざけているのだ。

しかし、それはあくまでも私信でのことだ。公表しようなどとは考えていない。

錢玄同の文章では、このあと1934年まで飛んでしまう。その中間には王敬軒に触れるものが、今のところみつからない。

劉半農を回想した錢の文章がある。15年前(としている)のことに触れて、劉が林紘、“王敬軒”、丁福保らを痛罵した時のあの熱狂的態度が、まるでありありと目前にあるようだ、と書く^{*22}。

林紘と丁福保は実在する。王敬軒を引用符で囲ったのは、架空の人物である、と書き分けたと了解できる。その初出は1934年7月21日だ。鄭振鐸の「導論」が1935年だから、それよりも早い。しかし、錢玄同は、王敬軒が自分の偽名だとは書いていない。

また、彼は魯迅を回想してもいる。そこでは、当時の状況を次のようにのべる。

1917年、蔡元培が北京大学校長に就任し、陳独秀を文科学長に、胡適と劉半農を教授に招いた。陳胡劉の諸氏は新文化運動に力を尽し、文学革命を主張した。周作

人も北大教授に招かれた。周兄弟に勤めて『新青年』に文章を書いてもらい、紹興会館に足繁くかよい魯迅に催促して入手したのが「狂人日記」だ。

「狂人日記」成立についての銭玄同から見た回想になる。ここでは、銭は、自分と魯迅の交流をのべているだけで、王敬軒が出てくるわけではない。

以上をながめて、わかることがひとつある。銭玄同は、私信のなかでふざけて王敬軒名を使用することはあった。だが、公表した文章において自分の偽名であることを認めたことはなさそうだ。

私のいう偽名なのだから、銭玄同にしてみれば公の場において自分から積極的に暴露し認定するものではなからう。

魯迅が劉半農を回想した文章「憶劉半農君」(1934.8.1付)において、「……王敬軒に答えたなれあいの手紙[答王敬軒的双鑽信]……」*23と書いている。「なれあい」だとわかっていた。日付からしてこちらも鄭振鐸の「導論」よりも早い。魯迅は、留学先の日本で銭玄同を知った。のちにふたりが親しくつきあったのは、1917-26年だった。銭が魯迅を追悼する文章のなかでそう書いている。王敬軒名義の捏造論文が発表された1918年は、まさに、その時期にあたる。銭玄同自身から王敬軒にまつわる内実を聞いていたと考えて間違いないだろう。

前に引用したように『呐喊』の「自序」には、金心異という名前で銭玄同が登場している。ただし、王敬軒の件には触れていない。

もうひとつ、魯迅が筆名康伯度で発表した文章がある*24。「昔の若者が、心中に劉半農という3文字で刻まれた原因は、彼が音韻学を得意としていた、あるいはいつも戯れ詩をつくっていたからではない。彼が鴛鴦蝴蝶派から飛び出して王敬軒を罵倒し『文学革命』陣中の闘士となったからである」

こちらでは王敬軒を出してはいるが名前だけにすぎない。裏の事情については、魯迅は、説明しようとはしない。

以上を見れば、ここでもある推測をすることが可能だ。王敬軒問題について、銭玄同本人が公には沈黙している。これをはじめとして、関係者はなんとなく口をつぐんでいる。ほのめかしはするが、声を大にして指摘するわけでもない。その理由は、手紙を捏造したという行為には誇るものがないという自覚が共通してあったからではないか。そこに鄭振鐸があらわれて事の真相を暴露する。くりかえす。鄭は居直ったのである。

劉半農の親族はどのように認識しているか。時間は下るが、参考までに紹介して

おく。

劉小蕙『父親劉半農』(世紀出版集團、上海人民出版社2000.9)を見た。その「附録二：劉半農大事年表」の1918年3月の項目に次のように書いている。「『新青年』第4巻第3号誌上に「文学革命之反響 奉答王敬軒書」を發表し、錢玄同と協力して当時社会の封建復古思想に対して反撃を行ない、文学革命に対してははっきりとした態度を表明した」(156頁)。王敬軒が錢玄同の筆名であることは、今では常識だ。「錢玄同と協力して[与錢玄同合作]」と記述しているのはそれにもとづいて説明している。それだけのこと。常識の範囲内におさまる。新しい発見があるわけではない。

王敬軒にまつわる実名暴露の経過については、結局のところ、以上のところまでしかわからない。

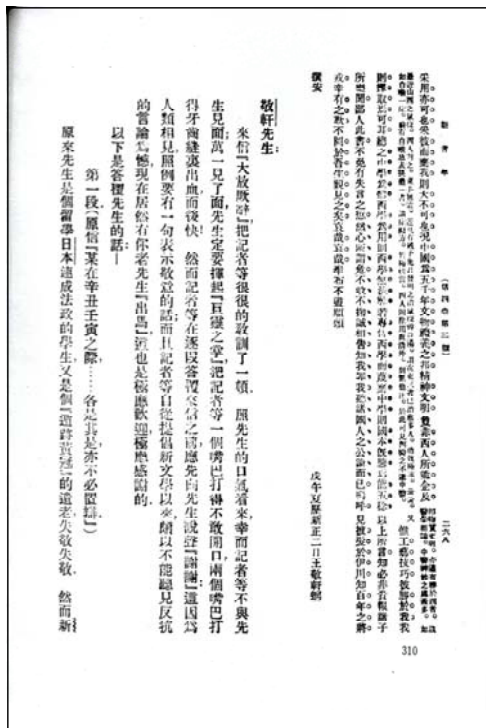
さて、鄭振鐸は、『中国新文学大系』第2集文学論争集においてわざわざ「第二編從王敬軒到林琴南」と項目をたてた。関連論文をここにまとめている。その冒頭に置くのが王敬軒名の捏造論文だ。これが革命文学運動の転換点になったという認識が鄭振鐸にはあったからだとわかる。それほど重要な論文だった。

ただし、転換点の重要論文が捏造だったという点が、私にはどうしても引っかかる。もっと真っ当な方法はなかったのか。注目を集めるためなら何でもしたのか。何をしてもいいのか。そう、彼らは、文学革命のためなら、何をしてもいいと考えていたに違いない。その正当化のひとつが鄭振鐸の編集になる『中国新文学大系』第2集文学論争集である*25。

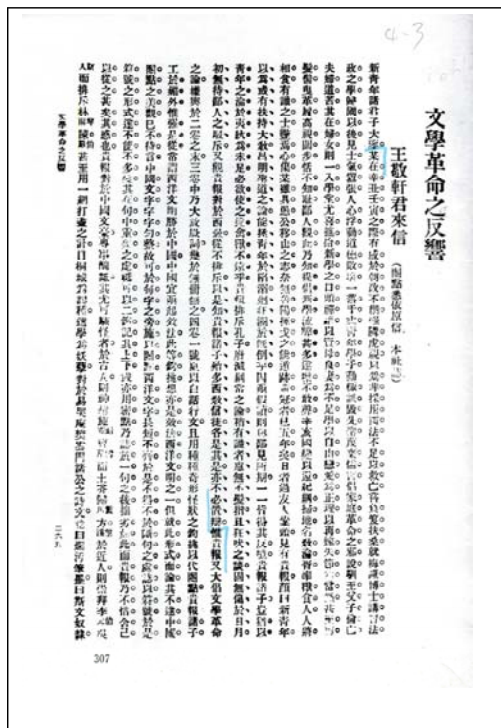
錢玄同(偽名が王敬軒)のばあい

1918年当時、林紓は、六十七歳になっていた。文学革命に当事者たちの年齢は関係がない。ただ参考のためにだけ各人の年齢を示す。

陳独秀(1879-1942)	四十歳
錢玄同(1887-1939)	三十二歳
劉半農(1891-1934)	二十八歳
胡適(1891-1962)	二十八歳
羅家倫(1897-1969)	二十二歳
鄭振鐸(1898-1958)	二十一歳



劉半農の反論



王敬軒名の捏造論文

なるほど、年齢だけから見ても老人（旧人）対若者（新人）という図式が成立しそうだ。林紓の六十七歳にくらべれば、これに、魯迅（1881-1936）の三十八歳、周作人（1885-1967）の三十四歳を加えても、陳独秀を含めて彼らは全員が若者である。それにしても、林紓ひとりに対して複数の青年がたばになって批判する情景は、どこか異様に見える。

舞台は『新青年』第4巻第3号（1918.3.15）の「文学革命之反響」欄だった。

『新青年』は、もともと読者からの手紙欄を開設していた。編集部あての手紙だから「王敬軒君來信」と題された理由だ。題名の下に「圈点はすべてもとの手紙のまま」と注釈をつける。これにも意味がある（後述）。劉半農の反論が同時に掲載されて対になる。劉の文章は、王名義の手紙に比較して約3倍半もある。簡単な返答ではないことが、その圧倒的な分量によって示されている。

劉半農は、以下のように8分解して記述する。今、それにあわせて内容を要約して紹介したい。

第1段

王敬軒の自己紹介からはじまる。辛丑（1901）壬寅（1902）、日本に留学し梅謙博

士について法政の学を学んで帰国した。帰国後に見るものは、士気は放縦、人心は浮動し、道徳は損なわれてガタガタである。家庭革命の邪説が唱えられてもいる。新学が提唱されて流弊がはなはだしいことを知るのだ。『新青年』は孔子を排斥し、儒教の根本を廃棄せよとの論を掲載する。諸君は外国教〔西教〕の信徒であると知った。307頁

王敬軒は日本に留学していたという設定になっている。錢玄同は、1906年、日本に留学し早稲田大学在学中に魯迅らを知った。自らの経歴を踏まえているのだろう。

第1段では、王敬軒が日本留学を経験していて、頭の固い孔子教の信者だと読者が理解するようになっている。外国に関係していながら、頭の中身は保守そのもの。おのずと林紓を連想するように誘導するのだ。

これに対して劉半農は、どのように反論したか。

まず、批判の文章を寄せてくれたことに感謝する。すなわち、「記者（注：劉半農のこと）らは新文学を提唱して以来、反抗の言論を聞くことができなかつたことを残念に思っていた」（310頁）と書いている。語るに落ちるとはこのことだ。反応がなかつたからこそ文書捏造に走った。

さて、劉半農は王の経歴に触れる。日本に留学し速成法政の学生だったのか、と。梅謙次郎が法政大学を設立していることを知ってこう指摘した。一般にいて、「梅謙博士」からすぐさま言及できることではない。錢玄同と劉半農が裏で連絡をとっていることの証拠だ。「梅謙博士」はあとで劉半農の文章にもう一度出てくる。

『新青年』が孔子を排斥しているのには理由がある。それが王には理解できないのだろう。「根拠のない狂気の叫びは堅牢で時世とは無関係〔狂吠之談固、無傷於日月〕」（311頁）だと劉半農は罵りかえす。外国教は孔子教よりもまし、という比較の問題にすぎない。陳独秀、蔡元培の名前と文章名をあげて、彼らの考えに同調していることを示す。罵りの応酬である。

第2段

王敬軒は、問題は記号であるとのべる。『新青年』は文学革命を提唱し、奇怪な形状のカッコを使用し圈点に替えている。外国に媚びている。中国文字には圈点があう。307頁

劉半農の反論。外国式の符号を採用しているのは、中国の符号では間に合わないからだ。312頁

王は日本に留学しているのに、それが理解できないのか、という意味を含ませて

いる。

王敬軒手紙の冒頭、題名下に「圈点はすべてもとの手紙のまま」と注釈がつけられていることを指摘した。王敬軒のほぼ全文には圈点がほどこされている。小さな活字に3種類の圈点をくまなくつけるから読みにくいことはなほだしい。段落もおかない。くわえて(偶然だが)印刷が不鮮明である部分もあって、読みにくさを倍加させる。一方の劉半農論文は、大きな活字を使用し段落をもうけゆったりと組版している。圈点にかえて傍線をほどこして読みやすい。『新青年』の編集者は、そういう印象を与えるように活字をわざわざ指定した。用意周到だということができる。なにがなんでも反撃しないではおかない、という劉半農らの意志の強さを感じる。

外国式の符号を使用するように提案したのは銭玄同その人である。だが、王敬軒名の文章では、銭自らの主張とは反対の中国本来の圈点を強調する。自分の考えではないことを述べるばあいを使用した王敬軒名は、ゆえに筆名ではありえない。偽名というべきだ、とくりかえす。

第3段

中国の文豪を無視していると王はのべる。近人では李伯元、吳趸人、林琴南、陳伯廉らだ。「桐城派はろくでなし、文選学は魔物だと見なしている[目桐城為謬種。選学為妖孽]」。林紓のいう「而方姚卒不之踣」は、前の文からの続きを見なければならぬ。307-308頁

劉半農は、樊増祥と易順鼎の作品から「くそ[爛汚]」部分を引用して反論する。林紓の語句は、語調が問題ではなく文法問題だ。313-314頁

林紓の語句を出して次の第4段の前ぶれとする。

第4段

王敬軒は、「林氏は当代の文豪である」と書きはじめる。

林紓は、唐代小説の気品でもって外国小説を翻訳している。外国人のことを述べているにもかかわらず、それを感じさせない。尋常の文人ができることではない。ところが、貴報(注:『新青年』のこと)は通じないと中傷しているのは、まことに予想外のことである[真出人意外](308頁)。4巻1号に掲載された周君の翻訳した陀思の小説こそが、通じないという批評があたる。某(注:王敬軒のこと)は外国語はできず陀思の原文がどのようなものか知らない。が、もし原文がこのように通じないものであれば翻訳するにはおよばない。吟辺燕語、香鉤情眼など林氏の翻

訳小説こそがすばらしい。また、掲載される白話詩は噴飯ものである。308頁

林紓を擁護し支持してみせる。だが、勇み足の箇所があることにお気づきだろう。『新青年』ではそれまで表だって林紓批判を行なってはいない。当てこすり、林紓の名前に触れることはあったにしてもだ。それにもかかわらず、あたかも『新青年』誌上で批判が実行されたかのように書いた。そうでもしなければ林紓擁護の手紙が成立しないとわかっていたからだ。

劉半農の林紓評価に関する反論は、約5頁もある。力を込めた部分だと考えてよい。ここが主要箇所なのだ。劉は、さらに段落を4つに区切るからそれに従う(小見出しは、理解しやすいように樽本がつけた)。まず、劉の言い分を聞こう。

1. 林紓の翻訳小説

林紓が翻訳した小説を「娯楽本[閑書]」として見れば攻撃する必要はない。たとえば「ハガード[哈氏]叢書!」などだ。しかし少しの文学的意味もない。

理由1: 原稿の選択がよくない。価値のない作品を翻訳している。

理由2: 誤りが多すぎる。原本と対照すると削り改め原本の面目を失っている。外国語が堪能でない友人が訳すことができない箇所、あるいは辞典を引くのを怠った箇所は、ごまかした。林氏は外国語を理解しないから、比較対照してもわからないのだろう。

理由3; 林氏がやっているのは「娯楽本」であって、文学意味のあるものではない。著書と訳書は根本的に異なる。訳書は原本に忠実でなければならない。314-315頁

劉半農があげた批判の理由3カ条は、のちの林紓批判の原点になった。

文学革命派が実行した林紓批判は、その根本に大衆小説に対する嫌悪、軽蔑が横たわっていた。文学ではなく娯楽本だというのだ。林紓訳書の大衆小説部分にのみ焦点をあわせ、林たちが娯楽書しか翻訳していないかのように言い募るのである。

だが、林紓たちの翻訳にはシェイクスピアも含まれているではないか。こちらのシェイクスピアについては、劉半農は特別に批判を加えた。そのあげく、とんでもない展開になる。事実を知れば、驚かない人はいないだろう。

2. 林訳『吟辺燕語』

王敬軒が推奨したふたつの書名があった。『吟辺燕語』と『香鈎情眼』*26だ。

『吟辺燕語』に関しての方がより重要な意味をもつ。こちらについて劉半農は、次のように批判した。

『吟辺燕語』は、本来は英国の戯曲である。林氏は「詩」と「戯曲」のふたつの区別がついていない」316頁

原文は「詩」と「戯」である。林紓は、シェイクスピアの「詩」、彼のことを「詩家」と称している。いうまでもなく詩人という意味だ。劉半農は、それにもとづいて「詩」と「戯」に分けるのだろう。ただし、実際に出てきたものは戯曲ではなく、散文で小説に仕立てたものだった。劉は、そこを攻撃する。つまり、林紓は、シェイクスピアの戯曲を小説に書き換えて翻訳してしまった。戯曲と小説の区別もつかないデタラメな翻訳である。『吟辺燕語』で代表させたのかもしれない。

なにが重要な意味をもつかといえば、この指摘は、のちのちまでもくり返して引用されることになるからだ。林紓批判の重要な根拠である。必ずといっていいくらいに理由としてあげられる1条だ。

劉半農のいう通りであれば、つまり、林紓らが戯曲を小説に書き換えたのであれば、いかななものかと私も思う。しかし、事実はそうではない。『吟辺燕語』の原作を知れば、問題は解決する。

該書は、(英) 莎士比著、林紓、魏易同訳『(英国詩人 神怪小説) 吟辺燕語』(上海・中国商務印書館 説部叢書一=8 光緒30.7(1904)/光緒32.4(1906)三版) である。

翻訳書の表示は、シェイクスピア著となっはいる。だが、実は、ラム姉弟 (CHARLES LAMB, MARY LAMB) 著『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』(1807) が原本なのだ。原本である『シェイクスピア物語』が小説仕立てなのだから、林紓たちはそのまま翻訳しただけにすぎない。

劉半農は、原本がラム姉弟のものだとは知らなかった。シェイクスピア著としか表示されていない。ならば原作は戯曲に決まっている。林紓が勝手に書き改めて小説にした、と判断した。誤解である。『吟辺燕語』についていうと、無知と誤解にもとづく批判だから、林紓たちにとってみればまったくの冤罪であり濡れ衣になる。ひどい話だ。

劉半農が自信満々で断定し、しかも実は誤ったこの批判は、後の学界に多大な影響を与えた。林紓批判を正当化する根拠となったのである。批判者の誰も、『吟辺燕語』の原作が何であるのか調査しようとはしない。調査せずして、劉半農の批判を口移しに引用して林紓批判の尻馬に乗るのである。

3. 「陀思之小説」

王敬軒は「周君の翻訳した陀思の小説」と書いた。「陀思の小説」はこのままだ

とわかりにくい。そう感じるように、わざとそのように表現したのだと理解できる。

劉半農は打ち合わせ通り、ここに嘸みつく。王のいう「陀思之小説」とは、(W. B. Trites 著、周作人訳)「陀思妥夫斯奇之小説」を指すのか、と。ドストエフスキーは、「陀思」のように中途半端な略しかたをするものではない。それでは林紓氏も賛成しないだろう。「梅謙博士」と同様に略すなら別人になってしまう。姓は梅、名は謙次郎なのだ指摘する。317頁

4. 胡適の白話詩

胡適の白話詩が気に入らなければ、できるものなら自分で修改してみればいいのだ。318頁

林紓批判の中核は以上である。残りは簡単にすませよう。

第5段

王敬軒はいう。西洋の字句を取り入れ、漢字の素晴らしさを知らない。西洋文学、それも詩と小説と、どちらかといえば小説のほうに重きをおいているが、幼稚なものだ。308-309頁

劉半農の反論。文字は思想学術を表わす符号にすぎない。小説を重視するといって批判するが、それならば、王氏が大いに持ち上げる林氏は自らが反省すれば後ろめたいところがはっきりする。319-321頁

林紓は大いに小説を翻訳している。だから、王敬軒が小説をくさすのは、いわば天に唾することだ、という意味だ。

第6段

王敬軒は、桐城の文、文選の文が外国人の白話詩に比較できない奥深さを有していると主張する。309頁

劉半農は言い返して、『新青年』が「桐城派はろくでなし、文選学は魔物だ」と反対していることはすでにこれ以上仔細に述べる必要もない、だ。321頁

第7段

今日の真に新文学を提唱できるのは、嚴復と林紓のふたりだけである。論理学を名学と訳し、理想国を烏托邦と訳すなどすばらしい。『新青年』が外国の文字を漢文にはめ込めるのに比べれば、その優劣は明らかだ。309頁

名詞の翻訳については再三討論しているが、解決することのできない難問なのだ。西洋の Logic と中国の名学は同じではないし、Utopia を烏託邦とするのは完全に音訳しているにすぎない。王敬軒が漢文に英語をはめ込むことに反対すれば、劉半

農は反論においてわざとローマ字を使用してみせる。嫌味全開である。

第8段

王敬軒は、新文学に反対しているわけではない。『新青年』の諸氏が旧文学を排斥し新文学のみを言うのに反対なのだ。309-310頁

「中学為体、西学為用」を提唱する。日本でいう「和魂洋才」にほかならない。

劉半農は逆であって、新しい知識が豊富でなければ旧学を研究する資格はないと反論する。325頁

以上、王敬軒（錢玄同）と劉半農の主張を紹介した。

『新青年』誌上でくりひろげられたこの問答は、文学革命派にとっては重要な位置を占める。運動の転換点となったからだ。

仲間どうして捏造した論争であるという考えが、どうしても私の頭から去らない。その意味で、最初から劉半農の勝利が約束された反論、論争なのだ。

それにもかかわらず、私が見れば『吟辺燕語』についてはほころびが生じてしまっている。その事を今まで誰も指摘したことがないというのも、妙な気分である。林紘を批判することがまったくの常識になっているためだろうと考えたりする。

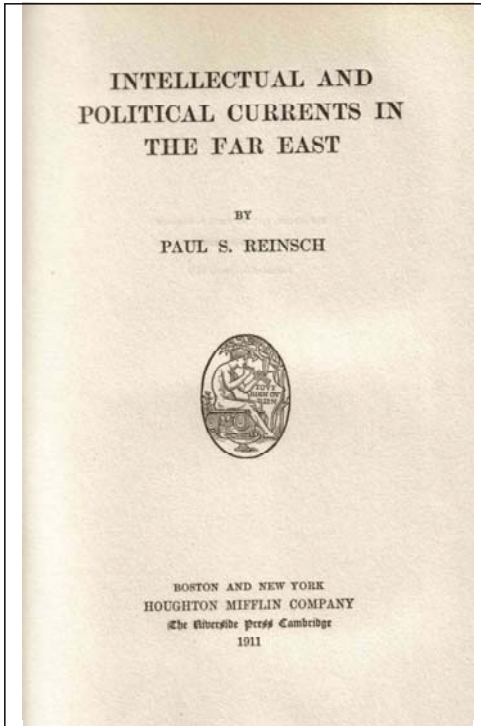
王敬軒に追隨する者が出現した。『新青年』第4巻第6号（1918.6.15）に「討論学理之自由権」と題して崇拜王敬軒先生者の投稿があるのがそれだ。本物か、あるいはこれも偽作なのか、それはわからない。それに対する陳独秀の返答「復崇拜王敬軒者」が掲載されていることを記しておく。

劉半農の林紘批判には、援軍が登場する。支援者は劉半農論文に触発され、林紘をどのように罵ってもよいと考えた。批判の程度をより拡張しており、これがさらに驚くべき結論に到達するのである。

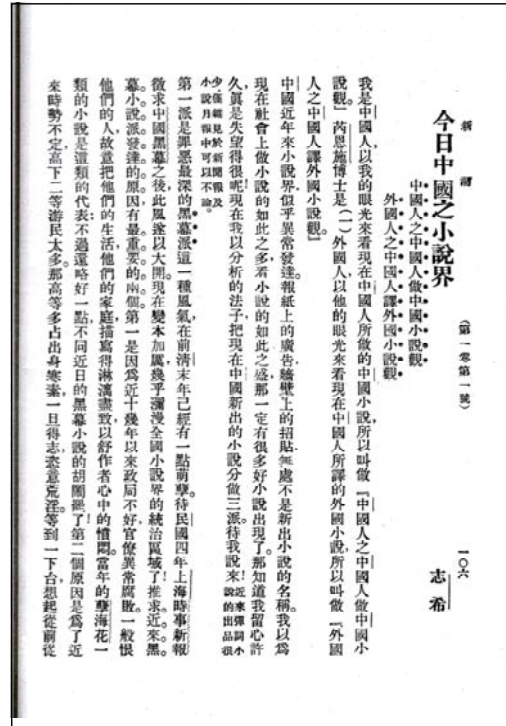
羅家倫のばあい

林紘批判は、外国人の援助をも得て行なわれた。といっても文字通りではない。少しひねってある。つまり、外国人の文章を引用して林紘を攻撃するのだ。中国人である著者が直接批判するよりも、権威、威力がさらにあるように感じたからだろう。高等技術だといってもいい。

志希「今日中国之小説界」（『新潮』第1巻第1号1919.1.1初出未見 / 上海書店影印1986.4. 106-117頁）がそれだ。志希は、羅家倫*27の字である。英語の著作を引用しているところが特徴だ。彼は、この後の1920年にアメリカへ留学する。それ以前から



ラインシュの著作



羅家倫の論文

英語が堪能だった。

羅家倫のこの論文は、べつに珍しいものではない。幻の林紓論文とは異なり、普通に読むことができる。『中国新文学大系』第2集文学論争集(1935)*28に収録されている。ゆえに、よく知られた論文であるといってもよい。

羅論文には、林紓批判のやり方が典型的にあらわれている。私が注目する理由だ。羅論文の内容は、みつつにわかる。

ひとつは、「中国人が書いた中国小説を中国人がどのように見るか」という。つまり、羅家倫が中国人を代表して目の前に流行している小説について分析する。もうひとつは、「中国人が翻訳した外国小説を外国人がどのように見るか」という内容だ。見る外国人はラインシュである。

ラインシュ (Paul S. Reinsch 1869-1923) は、1913年から6年間、アメリカ駐華公使をつとめた外交官である*29。

彼の著書 “Intellectual and Political Currents in the Far East [極東における知と政治の動向]”(HOUGHTON MIFFLIN COMPANY, 1911.11) の一部分を使用して羅論文が成立している。あとで詳しく紹介しよう。

最後は、小説家および外国小説の翻訳家へ向けての羅家倫による提言となっている。

羅家倫は、目前の小説を紹介して3種類に分類する。すなわち、官僚の異常な腐敗を暴露する小説〔黒幕派〕、千篇一律のうわついた恋愛小説〔濫調四六派〕（彼にとっては）どうでもいい無思想小説〔筆記派〕である。

羅がそれぞれの種類に当てはめた固有名詞を掲げた方が理解しやすい。暴露小説は、民国以前の『官場現形記』『孽海花』の流れをくむ、たとえば『留東外史』など。恋愛小説家としては、徐枕亜、李定夷の名前をあげる。無思想小説は、その内容を「言情」「神怪」「技撃」「軼事」に4分する。雑誌は、商務印書館が発行する『小説月報』があげてある。

これが、羅家倫の見た当時の中国小説界の現状だった。若者を害するこれらの書籍について、（小説を書くことを教えて）学生を陥れる組織について、教育部が早急に取り締まらないでいられようか*30、と書いていることに注目しておく。重要な箇所だからあとで問題にする。

ラインシュが見た中国における外国小説の翻訳については、どうか。

羅家倫は、ラインシュの文章を引用漢訳する前に、次のように述べて論文の方向付けを行なう。

中国人で外国小説を翻訳するものとしては、最初に林琴南氏をあげる。林氏は私たちの先輩であり、私は彼を攻撃（原文のまま）するつもりはない。林氏自身は外国語を理解せず、往々にしてだまされたと認めており、さらに彼の轍を踏まぬために外国語を学ぶようほかの人に勧めてもいる（四）。ゆえに「許す〔恕〕」という道理に照らして私も彼を攻撃したくはない。しかし、アメリカのラインシュ博士は、「賢者をしかる」という考えを抱いて林氏に対していくらか遠回りに批判している。110頁

文中の「四」というのは、羅による注釈だ。これを説明しておく。原文は、次のようになっている。「（四）見林訳撒克遜劫後英雄略自序」。すなわち、少しくわしくいうと、（英）司各徳著、林紘、魏易訳『（国民小説）撒克遜劫後英雄略』上下冊（上海商務印書館（1905.10）/1914.4再版 説部叢書1=27。原作は、WALTER SCOTT “IVANHOE” 1820）の林紘「序」に書いてあるという意味になる。

林紓は、この序において、伍昭辰が訪問した時、スコットの作品がよいことでふたりが意気投合したところから書き起こす。羅家倫が紹介した部分に該当する個所を以下に示そう。

私は外国語に通じておりませんが、訳述者がのべる物語を聞くたびに、往々にして伏線接続、変調脈絡のところになが古文家の言葉に大いに似ているものを感じるのです。……1頁

周知の通り林紓は、外国語ができなかった。翻訳者が口述するのを聞くはしから古文になおして筆記していた。彼は、そのやり方をここで述べているにすぎない。羅家倫は、どこから「往々にしてだまされた」という意見を引っ張り出してきたのか。不可解である。羅にこう書かれて、林紓がもしそれを読んだとして、彼は何のことだか理解しなかつたろう。さらに、羅の記述に該当する部分をさがすと、林紓序の末尾にとぶ。

惜しいことに、私はすでに五十四歳であり、書を抱えて学生のあとに従い、外国語の先生につくことはできない。訳書のすべては、耳にたより目をおおっていたわけで、まことに私の人生の大不幸であった。外国の文章の大家には、フランスではデュマ父子を知っており、イギリスではスコット、ハガード両氏を知っている。しかもスコット氏の本は、技巧が格別に違っているのだ。中国と外国の文章が異なっていることを考えると、私淑したくとも従うこともできない。ああ！若者学生諸君よ、この老人の過ちをどうして戒めにしないでいいものか！4頁

ここでは、林紓は外国語ができないことを「人生の大不幸」だと書いている。外国小説を味わうためには、外国語を理解していなければできないことだ。その程度の認識が林紓にあったことは、わかる。外国語を学ぶ環境にはいなかった彼は、その学習を若者にむかって謙虚に勧めている。それだけのことだ。自分の翻訳という仕事に自信を持っているがゆえに、自分のできなかった事柄について余裕をもって若者にむかって説いている。ここから林紓があたかも自責の念にさいなまれていると読みとるのは、過度の反応だと私は考える。

ということは、羅家倫が、林紓について外国語を理解していないことを恥じているように説明したのは、曲解だということになる。考えてみれば、自分の著作に関連して自らが不足していることをあからさまに述べることは、そうそうあることではない。自著のできればには自負の念を表明するのが通常だ。

林紓を「攻撃」するつもりはない、と書いて、羅家倫は冒頭からケンカ腰であることが明らかである。後輩である自分は攻撃しない、と否定してみせる。否定を装っている。だが、次に特別に外国人が登場する。ラインシュは、林紓を批判している、つまり、あえて「賢者をしかる」外国人が前面にでてくるという段取りだ。先輩後輩のしがらみのない外国人だからこそ中国の現実がよく理解できている、といたいらしい。その外国人が行なった林紓批判がどのような内容なのか、羅は、引用して丁寧に紹介する。少し長いが原文を翻訳して披露したい。ひとまとめに示すことが、羅家倫が林紓批判にさいして採用した彼の方法を理解するための助けになると考えるからだ。

ラインシュ博士がものした『遠東思想政治潮流』という本において、次のように書かれている。「中国人のなかに嚴復と同郷で名を林琴南という人がおり、彼は多くの西洋の小説を翻訳した。たとえば、Scott、Dumas、Hugo らの著作で最も多い。……中国は維新以来、文学という項目についてはなおまだ確実に有効な新しい動機、新しい基準がないとはいえ、旧文学の遺伝もまだ少しも打破されていない。ゆえに新文学の潮流も発生しておらず、現在、中国において西洋文学が勢力をもっているけれども、しかし中国人が翻訳する西洋小説を観察すると、中国人はなおまだ西洋文学の真の価値を理解していない。中国では近来ひとにぎりの文人が翻訳したのはすべて Harriet Beecher Stowe、Rider Haggard、^{ママ}Dumes、Hugo、Scott、Bulwer Lytton[、]^{ママ}Canan Doyle、^{ママ}Julds Verne、Gaboriau らの小説である。多くが冒険物語および「ロマンチズム [荒誕主義]」の不自然な作品だ。東方の読者が ^{ママ}Thai keray や ^{ママ}An tole france らの著作を理解するにはなお時間がかかるだろう」110頁

欧米の作家名は原文のままである。ただし、誤植がある。羅家倫は『新潮』創立のひとりであり編集者をもつとめているのだから誤植を減らす努力をしていたはずだ。だが、上のような結果になっている。誤植を指摘したついでに触れておく。羅

は、文中で2カ所でてくる「ロマンチズム [荒誕主義]」をふたつともに Romanism と書き誤る。

ラインシュは林紘を批判している、と羅家倫は書き始めた。だから、ラインシュの引用がそれに続いていれば、読者は、当然、林紘批判が継続して展開されていると受け取る。また、羅は、そう理解するように文章を構成して読者を誘導するのだ。だが、実のところ、林琴南が多くの西洋小説を翻訳した、とラインシュは書いているにすぎない。

注意してほしい。ラインシュは林紘批判を行なったと思いきむように、羅は読者を誘導するのだ。

ラインシュの原文をここで示せば、羅家倫がほどこした小細工が一目瞭然だろう。「第4章 中国革新運動における知的傾向 CHAPTER IV. INTELLECTUAL TENDENCIES IN THE CHINESE REFORM MOVEMENT」から原文を引用する。

Credit is also due ^{ママ} Sin Chin-nan, a fellow provincial of Yen Fu, for his admirable rendering into Chinese of the novels of Scott, Dickens, Dumas, Hugo, and other Western writers. p.158

荣誉は、当然ながら嚴復と同郷の林琴南にも与えられるべきだ。なぜなら、スコット、ディケンズ、デュマ、ユゴーほかの西洋作家の小説を、中国語へとすばらしい翻訳を行なったからである。

ラインシュは、林琴南の林をなぜかしら Sin と誤記した。それは、今は問わない。彼は、文章の前段で嚴復、梁啓超らの翻訳がすばらしいことを称賛している。その文脈におけば、林紘の翻訳も同様にラインシュから高い評価を受けていることは動かしようがない。しかるに、羅家倫は、文章の最初に置かれた「荣誉」についての語句を削除した。それは、ラインシュ論文にはもともと存在しない林紘批判を彼がいかにも行なっているかのように見せかけるためにはじゃまだったからだ。まさに、白を黒といいくるめるための小細工だといわざるをえない。また、ラインシュがあげた外国作家のなかからディケンズを省略したのも、羅家倫には特別の用意があったためである（後述）。

羅家倫の作文術は、知らない人が見れば手がこんでいる。私がそう考えるのは、「……」を利用してはるか後方に位置する文章をまるで一続きの文脈に存在してい

るかのように装っているからだ。魔術といってもいい。

「……」は原文で6頁分を意味する。それをとばして以下の原文が続く。

The definitive effect of the new movement on literary standards and production has therefore not yet declared itself. There has, however, been a great deal of indiscriminate borrowing from all kinds of sources. The fondness for literature inspired by the old traditions of China has not abated, but it cannot be said that any distinct tendencies of modern literature have emerged. European letters have thus far had but a superficial influence in China. It is always interesting to note what books will be first translated. Chinese editors and translators have judged that the following would best respond to the curiosity and intellectual wants of their public: Harriet Beecher Stowe, Rider Haggard, Dumas, Hugo, Scott, Bulwer-Lytton, Conan Doyle, Jules Verne, Gaboriau, and Zola. That being so, we must needs submit to having our literary tastes and standards judged for a while according to the impression made by these writers. It seems to be quite generally true that the books first translated are tales of adventure or the artificial products of romanticism. It is only slowly that Oriental readers learn to care for or come to understand a Thackeray or an Anatole France. pp.164-165

文学の基準について、新しい運動による決定的な結果および作品は、ゆえにまだ明らかにされてはいない。しかし、すべての種類の源から大量に見境のない取り込みがなされている。中国の古い伝統に刺激された文学への愛好も衰えてはいないが、しかし、近代文学の明確な潮流が出現したということもできない。ヨーロッパ文学がおおいにもたらされたが、中国では表面的な影響にすぎない。どのような書籍が最初に翻訳されるのかを記録することはいつも興味深い。中国の編集者と翻訳者たちは、次のようなものが一般大衆の好奇心と知的要求にもっともこたえるものだと判断した。すなわち、ハリエット・ピーチャー・ストーリー、ライダー・ハガード、デュマ、ユゴー、スコット、ブルワー＝リットン、コナン・ドイル、ジュール・ヴェルヌ、ガボリオそしてゾラである。ゆえに、私たちは次のことを甘受しなければならない。すなわち、私たちの文学趣味および標準はしばらくの間、それらの作家によって作られた印象によって判断されているということ。最初に翻訳された書物は、冒険物語か技巧を

こらしたロマンチズムの作品であることは、一般にあってまったく事実であるらしく思われる。東方の読者がサッカレイあるいはアナトール・フランスの作品を好むようになる、あるいは理解するようになるにはもうすこし時間がかかるだろう。

この部分は、中国における当時の翻訳作品についての一般状況を説明しているだけだ。たしかに林紘とは無関係ではない。だが、西洋文学を翻訳したのは林紘だけではなかった。ラインシュがあげた作家たちの翻訳の多くは、林紘以外の人々も漢訳している。全体を見ればきわだった貢献をしたのは林紘であるにしても、そのすべての責任を林紘ひとりに押しつけることはできない。当然のことだ。

羅家倫は、一般的な解説を林紘についての説明に直結した。そうすることにより、ラインシュの記述が、すべて林紘についてのものであるかのように読めてしまう。これが羅のほどこした工夫なのだ。

もうひとつ、日本文学についての紹介がある。

羅は、ラインシュの文章から引用して日本での創作、翻訳は東京弁で行なわれていることなど、日本文学の状況について作家名をあげて要約説明した。それらの人名は、たとえば、Toson Shimazaki、Mori Ogwai、Homēci Iwano、Natzume、Kwatai Tayama、Tafu Nagai、Tunikida、Has^{ママ}agawa という調子だ。

原著が英文だから西洋の作家を原文であげるのしかたがない。それでも英文の作家名を見て理解できる読者は限られる。英語ができる人しか相手にしない、という態度表明だろう。だが、日本の作家名をラインシュの記述をそのまま、しかも羅が責められるべき誤植をまぶして（Has^{ママ}agawa はラインシュの間違い）提出するのはいかがなものか。漢字という便利なものがあるではないか。島崎藤村、森鷗外、岩野泡鳴、夏目（漱石）、田山花袋、永井荷風、国木田（独歩）、長谷川（辰之助。二葉亭四迷）と表示する知識と親切心が、羅家倫には欠けていた。もっとも、該論文の主旨は、学術上の正確さを追求するという誠実さとは無縁のものだ。だから、それでかまわないという見解は成立する。

日本の紹介部分の最後で羅が翻訳した箇所を下に原文とともに示す。

Among English novelists, none is more widely read in Japan than Dickens. p.328
日本において、英国小説家たちのなかで、もっとも広く読まれたのはディケン

ズをおいていない。

但是訳出最多，為社会最崇拜的是 Dickens 呢！111頁

しかし、翻訳が最も多く社会で最も崇拜されたのはディケンズであった。

羅家倫は、日本でディケンズが好評を博したことを強調したかった。そのため、ラインシュが林紘賛美のなかで言及していたディケンズを意図的に削除したのである。評価されるディケンズの作品を林紘が複数翻訳しては都合が悪かった。姑息なやり方である。

ラインシュ論文を紹介して締めくくりをどうしたか。

ラインシュ博士の言葉は以上の通りである。林氏および中国の小説翻訳家に考えてもらいたいと私は希望する。111頁

こう書かれてラインシュ自身は驚くと同時に困惑するのではなからうか。そんなことは書いてはいない、と彼はいうだろう。ラインシュにしてみれば、自分の著作を著者の意図とはまったく逆の方向に勝手に使用されて迷惑であったに違いない。

最後の提言部分を簡単に紹介する。羅家倫が重ねて強調するのは、小説は社会を改良するためにあるという点だ。それを理解して創作、翻訳をやれという提言となる。梁啓超の主張が、羅に受け継がれていることが理解できる。

さらにいえば、彼は、魏易、馬君武の翻訳をとりあげ、勝手に削除すると批判している。こう書くのは、読者を誤誘導して巧妙だ。翻訳家としてやってはならない、と羅家倫が述べるのだから、まさか羅自身が自分の論文で勝手に削除しているとは誰も思わない。

あきれるとはこのことだ。自分がラインシュ論文について行なった削除は棚にあげている。林紘批判をくりひろげるために必要であれば自分には許す行為だが、他人が似たことを実行すると許さないと批判するのである。こういうのを、一般に二重基準という。手前勝手といいなおしてもいい。

羅家倫が、ポロリともらした取り締まりについて検討しよう。

官憲による上からの弾圧を歓迎主張する

羅家倫は、当時流行していた恋愛小説と、それを書くように教える組織について、

教育部が取り締まらないはずがない、と書いていることを紹介した。実は、彼は、それより前の部分にも同様の記述をしている。

すなわち、1916年、范静生が教育総長だった時、内務部とともに暴露小説およびそれを掲載した雑誌など数十種を取り締まった*31、と羅は説明する。そればかりか、彼は、「私は、現在も当局は注意してしかるべきだと願っている」という。当局が取り締まることを期待している態度が露骨なのだ。

范静生が取り締まったのは1916年だ、と羅は明記した*32。たしかに、当時、言論弾圧はあった。

たとえば、宋原放「近代出版大事記」には「1916年 内務部は民国2年11月より5年3月まで、中外の新聞雑誌印刷物全部で60種を取り締まった」*33と説明がある。注意しなければならないのは、取り締まりが行なわれたのは1913年11月から1916年3月までだった点だ。1913年といえば、第2革命になる。辛亥革命（第1革命）につづいて袁世凱の国民党弾圧に対して討袁の兵をあげた。これが失敗して、言論界では弾圧の嵐が吹き荒れる。ある資料によれば、1913年5月から1916年2月まで93種類の新聞雑誌が発行禁止処分になっている。これには、中国国内ばかりではなく海外に発行拠点をもちものも含まれる。

掲げられた処分理由は、治安妨害、言論激烈、政府攻撃、政府誹謗、革命主張、帝制反対、革命鼓吹などである*34。取り締まりの根拠にされたのは、袁世凱が発した「出版法」（1914.12.4公布）、「報紙条例」（1914.4.2公布）などになるのだろう*35。

後者の第10条には、新聞に掲載してはならないものを、政体混乱、治安妨害、風俗腐敗などなど8項目にわたって明記する。どの項目をみてもはっきりと定義できるものではない。政府にとって都合が悪いことは自在に禁止することが可能な法律だ。当局者には便利このうえもなく、言論界にとってはあってはならない悪法である。ゆえに、1916年6月6日に袁世凱が死去し、その1ヵ月後には、以前に発禁になっていた新聞について北京政府内務部は解禁を通知し、さらに「報紙条例」を廃止している*36。

以上、いきさつを簡単にたどるだけで羅家倫の説明がおかしいことがわかる。つまり、羅が該論文を発表したのは、すでに「報紙条例」が廃止になった後である。それよりもずっと以前の弾圧を蒸し返すのだ。あたかも廃止されたのが不満であるかのようだ。しかも、弾圧をやれ、と主張する。にわかには信じがたい。

自分の理想とする小説が出現しない文藝界の現状を、羅家倫が批判するのは理解

できる。だが、いくら自分に気に入らない小説がもてはやされているとはいえ、それを官憲が取り締まり、弾圧することを望むとはどういう神経なのだろうか。少なくとも、表現の自由がある、という認識が彼には欠落している。

文学革命派の人間が、時の権力である教育部の出勤と取り締まりを期待するというこの奇妙な事実に、私は首をひねらないでもない。ただ、文学を革命するためには、捏造論文であろうとなんでであろうと手段を選ばないという意味であれば、私はそれなりに理解する。

ラインシュが書いてもいない林紓批判を羅が捏造した点だけを見ても、その論文の水準はあまりにも低すぎる。当局に言論弾圧を期待するなど、内容が悪すぎる。しかも、彼の言論弾圧期待論は、のちの流言飛語が発生する源となっている可能性がたかい。羅家倫論文は、箒にも棒にもかからない愚劣なものだと私は判断する。

以上が、「五四運動の学生リーダーの一人」と称された羅家倫がくりひろげた林紓批判の中身である。 ㊦

【附記】本稿は、2006年度大阪経済大学特別研究費による成果の一部である。

【注】

- 15) 曾虛白主編『中国新聞史』台湾・国立政治大学新聞研究所1966.4初版未見 / 1977.3四版。275、325頁。方漢奇『中国近代報刊史』太原・山西教育出版社1981.6初版未見 / 1996.7四次印刷。714-716頁。方漢奇主編『中国新聞事業通史』第1巻北京・中国人民大学出版社1992.9。1057頁。『中国近代報刊名録』が、これを採録しないのはなぜか。その理由は不明。
- 16) 方漢奇『中国近代報刊史』694頁
- 17) 鄭振鐸と商務印書館のかかわりについては次の論文がある。松村茂樹「王雲五と鄭振鐸 商務印書館史の一断面」『中国文化』漢文学会会報第52号1994.6.25
- 18) 魯迅「自序」『呐喊』新潮社1923.8影印本。 頁
- 19) 北京魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅研究資料』9 天津人民出版社1982.1。102頁
- 20) 『每週評論』4 1919.1.12影印本
- 21) 『錢玄同文集』第6巻書信 北京・中国人民大学出版社2000.8。18頁
- 22) 錢玄同「亡友劉半農先生」『世界日報・国語周刊』1934.7.21初出未見。沈永宝編『錢玄同五四時期言論集』上海・東方出版中心1998.10。378頁。また、『錢

- 玄同文集』第2巻随感録及其他 北京・中国人民大学出版社1999.4。295頁
- 23) 魯迅「憶劉半農君」1934.8.1付 / 『青年界』第6巻第3期1934.10未見 / 『且介亭雜文』『魯迅全集』第6巻北京・人民文学出版社1981/1982北京第1次印刷所収による。71頁
- 24) 「趨時和復古」1934.8.13付(『申報』初出には日付なし) / 『申報』「自由談」1934.8.15 / 『花邊文学』『魯迅全集』第5巻北京・人民文学出版社1981/1982北京第1次印刷所収。535頁。なお、参考までに巖波青著、沢本香子訳「劉半農と魯迅」(『中国文芸研究会会報』第161号1995.3.31)から引用する。「劉半農先生(1891-1934)が、上海からやってきて北京大学の予科で教えたのは、たぶん1916年のことだった。魯迅の回想によると、劉半農が北京大学に来たのは、彼が『新青年』に投稿したのが縁で、蔡元培あるいは陳独秀によって招かれたということらしい。彼は、北京到着後、授業を行なうほか積極的に『新青年』へ原稿を書いた。もっとも有名なのは、錢玄同が「王敬軒」という仮名で『新青年』に口語文を攻撃する手紙を書き、劉半農が痛烈に反駁するという「なれあいの手紙」である。これより陳独秀、錢玄同、李大釗、沈尹默、胡適などが交代で『新青年』の編集を担当した。 / 劉半農はかつて上海において鴛鴦蝴蝶派の『小説大観』などの刊行物に「売花女侠」「鬚俠復讐記」「催租夫」などの小説を発表したことがある。使用した名前も上海派文人の色彩をおびた「伴儂」「半儂」であった。こちらはのちに「半農」とようやく改めたが、北京到着後もなお上海からひきずってきた才子佳人の思想をいくぶん持っていた」4頁
- 25) 次の論文が参考になる。リディア・リウ著、中里見敬訳「『中国新文学大系』の成立」(九州大学大学院言語文化研究院言語研究会)『言語科学』第36号2001
- 26) (法)小仲馬著、林紓、王慶通訳『香鉤情眼』上下冊 上海・商務印書館1916.5 説部叢書3=5。デュマ フィス(ALEXANDRE DUMAS fils)の“ANTONINE”1849という。
- 27) その略歴を橋川時雄『中国文化界人物総鑑』(北京・中華法令編印館1940.10.25初版 / 名著普及会復刻1982.3.20。787頁)から引用する。「羅家倫 一八九五^{ママ}-x字は志希、浙江紹興の人。北京大学卒業後米国プリンストン大学、仏国パリー大学、独逸ベルリン大学、英国ロンドン大学に歴史及哲学を学ぶ。帰国後北京に於て月刊「文藝復興」の編輯長として白話文学に貢献、民国十五年に国立東南大学歴史教授、其の後国民政府中央法制委員会委員、中央党務学校副主任十

七年に国立北京清華大学校長に任じ、二十年三月辞して国立武漢大学、中央政治学校等に教鞭を執り、国民党中央候補執行委員となり、二十一年八月南京中央大学長に任じ、牙齒専科学校長を兼任す、二十八年三月重慶第三回全国教育会議に出席。其の著書に「科学与玄学」、(十六年商務印書館)、其の訳書に「平民政治的基本原理」(米P.S.Reinch原著 十六年同上)、「思想自由史」、(英J.B.Buby英原、著同上)など。また、以下の文章がある。劉敬坤「致力我国高等教育事業的羅家倫」宋嘉沛主編『民国著名人物伝』第4卷 北京・中国青年出版社1997.11。284-303頁

- 28)「第7編旧小説的喪鐘」と題する項目に収録された。
- 29)ラインシュについては、以下の論文がある。藤岡喜久男「駐華米公使P.S.ラインシュ覚え書(一)」『北海学園大学法学研究』第11巻第2号北海学園大学法学会1975.11.20。ただし、藤岡論文は駐華公使時代についてのものだ。本稿とは直接には関係がない。
- 30)「這種遣誤青年的書籍，這種陷害学子的機關，教育部能不從速取締嗎？」108頁。
- 31)「政府也有干涉之說。民国五年范静生先生做教育總長的時候，曾經同内務部查禁這一類的雜誌小説数十種。我盼望現在各位当局留意点纔是」107-108頁
- 32)梁容若「記范静生先生」(台湾『伝記文学』第1巻第6期1962.11.1)には、関係する記述はなかった。
- 33)宋原放「近代出版大事記」宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3巻 武漢・湖北教育出版社2004.10。617頁
- 34)劉再生『中国近代現代出版通史』第2巻 北京・華文出版社2002.1。97-101頁
- 35)劉再生『中国近代現代出版通史』第2巻。1258-1264頁
- 36)宋原放「近代出版大事記」。617頁。「[1916年]7月6日 北京政府内務部通知前已查禁的上海《民国日報》、《中華新報》、《民信日報》、《五七報》、《公論報》、《甲寅》雜誌、《正誼》雜誌、《愛國報》、《愛國晚報》、《救亡報》、《中国白話報》、《中華革新報》、《時事新報》、《共和新報》、《民意報》等報刊，予以解禁。」 / 「[1916年]7月16日 段祺瑞以大總統申令，廢止報紙条例」。また、沈涓濱主編『中国歴史大事年表・近代巻』上海辞書出版社1999.2、763頁。

(たるもと てるお)